文化構想学科　アジア文化コース

ジャカルタ日本人学校が提供する教育の特徴と、生徒にもたらす影響についての研究

文学部　2023 年度

A20LA147

よねかわ　ともき

米川　　朋希

目次

第 1 章　序論.....1
1.1 本研究の背景、目的.....1
1.2 先行研究との比較と本研究の新規性.....1
1.3 筆者の立場.....4
1.4 論文の構成.....4
第 2 章　ジャカルタ日本人学校の概要.....5
2.1 JJS の基本情報.....5
2.2 JJS の歴史.....6
2.3 JJS の設備.....9
2.4 JJS の部活動.....9
第 3 章　『みなみ十字』の分析.....9
3.1 『みなみ十字』の概要.....9
3.2 調査の対象.....10
3.3 分類項目の定義.....10
3.4 分析結果.....11
3.5 調査結果を経た考察.....12
3.6 『みなみ十字」の調査において留意するべき点.....15
3.7 『みなみ十字』の調査についての総括.....16
第 4 章　元 JJS 生、保護者、教員へのインタビュー調査.....16
4.1 インタビュー調査の実施方法.....16
4.2 元 JJS 生、保護者へのインタビュー調査の結果.....16
4.2.1 保護者へのインタビュー調査：O 氏の場合.....16
4.2.2 保護者へのインタビュー調査：M 氏の場合.....18
4.2.3 保護者へのインタビュー調査：K 氏の場合.....20
4.2.4 元 JJS 生へのインタビュー調査：K・M 氏の場合.....21
4.2.5 保護者へのインタビュー調査： S 氏の場合.....22
4.2.6　元 JJS 生へのインタビュー調査：S・H 氏の場合.....23
4.2.7 元 JJS 生へのインタビュー調査：S・S 氏の場合.....25
4.2.8 保護者へのインタビュー調査：S・A 氏の場合.....26
4.3 JJS 教員へのインタビュー調査.....27
4.3.1 教員へのインタビュー調査：K 先生の場合.....27
4.3.2 教員へのインタビュー調査：Y 先生の場合.....31
第 5 章　調査全体の考察.....34
5.1　『みなみ十字』の調査、インタビュー調査を経て考えられる、JJS の特徴.....34
5 .2　JJS の現状、今後についての筆者の考察.....35

参考文献 38

第 1 章　序論

1.1 本研究の背景、目的

芝野（2019）はグローバル人材育成の機運の高まりや海外移住する日本人の多様化の動きを要因として、日本と海外を行き来する日本人の子どもを指す、海外帰国生に注目が集まっていることを指摘している。日本が置かれている経済不況の打開や国際競争激化という背景から、グローバル人材の育成が重点的な国家戦略として掲げられるようになった。そのため近年では、日本の発展にとって貴重なものだと見なされる、豊富な海外経験をもつ海外帰国生にグローバル人材としての期待が高まっていると説明している。また同時に、海外帰国生を持つ親も、日本の学校教育だけでなく、グローバル人材に欠かせない英語力や順応力、社交力といったグローバル型能力を身につけさせようとしていると説明している[1]。

また文部科学省によると日本人学校とは、文部科学大臣から、国内の小学校、中学校、もしくは高等学校と同等の教育課程を有する旨の認定を受けている学校を指す。日本人学校中学部卒業者には、国内の高等学校の入学資格が付与される。令和 5 年 4 月 15 日現在、世界 49 カ国・1 地域に 94 校が設置されており、約 1 万 6 千人が学んでいる[2]。多くの先行研究は海外帰国生の増加を背景に日本人学校に着目し、彼らを取り巻く現状や課題について論じている。その中で、あまり研究対象となっていないのが、筆者が以前通学していたジャカルタ日本人学校（以下、JJS＝Jakarta Japanese School）である。そこで本論文では、他の先行研究では対象として扱われる機会が少なかった JJS に焦点を置き、先行研究で指摘されている海外の日本人学校の教育が持つ特徴が現在の JJS にも当てはまるかを検証し、JJS の教育が生徒にもたらす効果、影響を明らかにすることを目的とする。

1.2 先行研究との比較と本研究の新規性

日本人学校に関する主な先行研究としては、佐藤郡衛の研究が挙げられる。佐藤(1997)は、『海外・帰国子女教育の再構築－異文化間教育学の視点から』で、日本人学校教育の特徴、課題について以下のように述べている。

・原則的に学習指導要領に準拠して教育が行われているが、授業日数が日本よりも少ない上に現地理解教育の科目を設置している学校が多いため、カリキュラムが過密になる

日本国内の小・中学校の年間平均授業日数は 230 日である一方、多くの日本人学校は完全週 5 日制を取っているため、平均では 200～210 日の学校が最も多い。そのため、日数が少ない上にカリキュラムは大きく変わらないため、週あたりの授業数は増加する。それに加

---

[1] 芝野淳一「海外帰国生　教育問題の変遷と新たな動向」,額賀美紗子,芝野淳一,三浦綾希子『移民から教育を考える　子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』,株式会社ナカニシヤ出版,2019 年,p.47-54.

[2] 文部科学省「在外教育施設の概要」,https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/002.htm（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

えて、英語や現地語の学習、現地理解教育を追加で実施していることが、子どもたちが学校に拘束される時間が増加することに繋がっている。授業時間数が日本よりも少ないため、本来は子どもたちに学ばせる内容を精選する必要があるはずだが、実際には実施されておらず、内容的にも過密なカリキュラムとなっている。

・外国語の学習、現地の自然・社会などの学習、現地交流、交歓学習などが位置付けられている

特に生活科、社会科、理科などは、日本と自然条件や社会的条件が異なるため、学習内容・方法も日本と異なっており、各校の在留国に合わせて、独自教材の開発や体験学習/フィールドワークの導入といった工夫が必要であり、各日本人学校で多様な取り組みが実施されている。ただし、現地の地域学習は限られた学年が対象とされており、単なる表面的な知識の学習にとどまっていることが多い。そして、現地校との交流学習にも一筋縄ではいかない問題がある。このような現状や調査を踏まえ、佐藤は「日本人学校の現地理解教育が十分に効果を上げるまでになっていない」としている。

・小学校 1 年から外国語を学習しており、中学生でも標準時数よりも多くの時間が割かれている

週 1 ～3 時間程度の外国語の授業が行われているが授業時間数が少ない上、実際に使用する場面も少なく、必ずしも十分な効果は上がっていない。

・英語圏の日本人学校を除き、在留国の言語を学習する時間がある

現地の言語を学習する時間の設け方に関しては、日本人学校が在留国においてどのような法的位置付けをされているかによって異なる。ただし、英語の授業と同様に、授業数が少ない上使用する機会がほとんどないことから、英語以上に教育の効果は薄いと思われる。加えて、「受験で役に立たない」という理由から現地語教育に反対する保護者も多く、子ども自身も熱心に取り組まないことから、現地語の学習は深まっていない。

・スクールバスで通学する子どもが多く、下校時間が決まっている

クラブ活動や部活動などがほとんどできないといった問題がある上、学校行事や日常の教育活動もスクールバスの運行時間に合わせざるを得ない[3]。

また、佐藤(2020)は別の文献で、かつてと比べて日本人学校に通う子供の割合が減少していることを指摘したうえで、日本人学校に必要な改革について考察している。1985 年には日本人学校に通う子供は全体の約 42%であったが、現在では 23%になっている。直近の 10 年間で海外に住む子供の数が増えているにも関わらず、日本人学校に通う子供の数は 2000 人しか増えていないことから、日本人学校が保護者や子どもから選ばれる学校になっているのかと疑問を呈している。その理由としては、日本人学校が、日本国内と同じ教育を行う場と考え、派遣される先生も日本国内の教育を行うことを是としてきたことが問題であると

[3] 佐藤郡衛『海外・帰国子女教育の再構築－異文化間教育学の視点から』,玉川大学出版部,1997 年,p.88-98.

している。しかし、いまや日本国内の教育も変わりつつある。特に、「PISA 型学力」や「21 世紀型スキル」（これらは知識や技能を活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力などを意味する）といった、グローバルな能力の育成が重視されるようになってきた。これらの内容から、日本人学校は、「グローバル型能力」への対応が必要になってきていると結論づけている。そのためには、①英語教育の拡充、②多様な見方、考え方を育成するための交流や多文化共生の教育の促進、③グローバルな課題の解決のための学習を通して、論理的に考える力や自分なりに判断できる力を育成していくこと、の 3 点が必要ではないかと提案している[4]。

また石附、鈴木(1991)は、日本人学校設立の経緯に触れたうえで、日本人学校が抱える「閉鎖性」という問題を指摘している。

日本の海外学校の一つである日本人学校は、「国内と同じ教育を施してほしい」という親たちの願いを満たすべく設立されてきた。日本人学校は、東南アジア諸国より開設され始めており、現在も多くの日本人学校がアジア、中近東、南アメリカといった開発途上国に存在する。言い換えると、アジア、中近東、南アメリカの国々では現地の教育程度が問題であり、かつ非英語圏であり、現地の学校に日本人学校の子弟を通学させるわけにはいかない、と考えられ、全日制の日本人学校が設立されてきたと石附らは説明している。そのような経緯を経てきた日本人学校は、「国内と同じ教育」を施すという国内化に大きく傾斜しており、保護者の関心もそこに向いている。しかし日本が世界経済のなかに組み込まれていくにしたがって、所在国理解教育や外国語教育といった国際化にも関心を払わざるをえなくなってきているとしている。そこでは、日本人学校においては国内化という機能に国際化という機能をどこまで加えるべきか、あるいは、加えられるかといったことが基本的問題となっていると石附らは主張する。そして発展途上国において「国内と同じ教育」を求めて設立され、教育をおこなってきたという意味で、石附らは日本人学校を、外に向かって「閉ざされた」海外学校と表現している。しかし、近年、現地語や英語教育がかなりの学校で学習されており、所在国理解教育のためのカリキュラムづくりが盛んであるうえ、現地校との交流教育もかなり行われている。よって今後の日本人学校はより「国際化」に傾斜をかけたもの、すなわち、より「開かれた」学校に向かっていくと石附らは推測している。それと同時に調査を通じて、日本人学校の子供が、閉ざされた日本人コミュニティの中で生活し、家と学校をスクールバスで往復し、日本語のみの生活を送り、友人も全て日本人という子どもたちの海外生活の実態を指摘している[5]。

---

[4] 佐藤郡衛「日本人学校の新たな課題」,佐藤郡衛,中村雅治,植野美穂,見世千賀子,近田由紀子,岡村郁子,渋谷真樹,佐々信行『海外で学ぶ子どもの教育－日本人学校、補習授業校の新たな挑戦』,株式会社明石書店,2020 年,p.34-41.

[5] 石附実,鈴木正幸『現代日本の教育と国際化』,福村出版株式会社,1991 年,p.98-104,p.123-134.

以上の研究成果は、特定の日本人学校を指して述べられているものではないため、各日本人学校においてこれらの特徴がどの程度当てはまるかは明らかにされていない。その上、JJS に主軸を置いて調査しているものは見られなかった点も踏まえると、本研究を通じて、先行研究に見られる主張、特徴は JJS に当てはまるのか、そして日本人学校の実情を生徒、教員、保護者がどう受け止めているのかを明らかにすることには意義があると筆者は捉えている。

1.3 筆者の立場

前述の通り、筆者は JJS の卒業生である。2010 年 1 月（当時小学校 2 年生）から 2014 年 3 月（当時小学校 6 年生）までの期間をインドネシアで過ごし、その間 JJS に通学していた。筆者としては、JJS での経験は自身の価値観やその後の進路選択に大きく影響があったように感じている。異なる文化を自分の目で捉え、実際に現地に出向き、異文化の存在を子どもながらに理解していくことで、「多文化共生」という言葉に親近感や関心を持つきっかけとなった。

しかしその一方で、当時の生活では現地の文化や人に直接触れる機会が少なかったのではないかとも考えている。当時は安全面の問題から、自宅のマンションの外には車でしか出ることができず、近隣の町を散歩するといったような経験はほとんどない。また、JJS の行事の一環としてインドネシアの現地校との交流などはあったが、自分からインドネシア人の友人と言葉を交わし、友人を作れたというような経験もない。この経験から、筆者自身としては、日本人学校での経験は、「多文化共生」を認識するきっかけとなったものの、実際に多文化共生を実践するという経験にまでは到達できていなかったと考えている。

この論文では、JJS に通った他の生徒たち、その保護者、そして JJS の教員の視点から捉える JJS の姿を調査し、当事者たちにとって JJS がどのように受容されているのかを述べることで、JJS の持つ特徴、課題を示す。

1.4 論文の構成

この論文では、文集『みなみ十字』、そして元 JJS 生やその保護者、教員へのインタビュー調査を通じて、JJS の教育が持つ特徴について考察していく。

まず第 2 章では、研究の対象となる JJS の概要や歴史、環境について説明する。

第 3 章では、JJS が発行している文集『みなみ十字』を分析する。JJS の生徒がインドネシアでの生活において、どの要素に関心を持っているのかを明らかにすることを試みる。

第 4 章では、元 JJS 生やその保護者、教員へのインタビュー調査の結果を述べる。JJS の教育は生徒、保護者、教員の 3 方面からどのように認識されているのかを見極めることを目指す。

第 5 章では、2 章、3 章、4 章で述べた内容に基づき、JJS に特有の特徴、生徒に与える影響を結論としてまとめる。

第 2 章　ジャカルタ日本人学校の概要

ここでは、研究の対象となるジャカルタ日本人学校（JJS）の概要を確認する。

2.1 JJS の基本情報

ジャカルタ日本人学校（JJS＝Jakarta Japanese School）は、日本から南に約 5,800 ㎞の赤道直下の国、インドネシア共和国の首都ジャカルタの郊外に所在する日本人学校である。1969 年 5 月に日本国大使館付属ジャカルタ日本人学校として[6]、生徒数 11 名で開校した[7]。

JJS は幼稚部、小学部、中学部から構成されており、2023 年 12 月 1 日時点で、現在小学部に 524 名、そして中学部に 169 名の生徒が通っている[8]。学年ごとの人数構成については、下の表の通りである。本研究では、小学部と中学部を主な調査対象とするため、幼稚部の情報に関しては省略する。

学年	生徒数
小学部1年	101
小学部２年	108
小学部3年	80
小学部4年	85
小学部5年	80
小学部6年	70
中学部1年	73
中学部2年	59
中学部3年	37

表１：JJSの学年ごとの児童生徒数（2023年12月1日時点）
（出所：ジャカルタ日本人学校「児童生徒数」より[9]、筆者作成）

海外赴任 navi によると、世界で最も児童生徒が多いバンコク日本人学校には約 2,000 人が通っており、シンガポール日本人学校にも約 1,900 人が通っている。その一方で、在籍

---

[6] ジャカルタ日本人学校「校長挨拶」,https://www.jjs.or.id/school-introduction/president-message（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

[7] ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』,p.277.

[8] ジャカルタ日本人学校「児童生徒数」,2023 年 12 月 1 日, https://www.jjs.or.id/school-introduction/member-number(最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

[9] 同上

数が 10 名程度に減ってしまっている日本人学校もある[10]。この点を踏まえると、JJS は日本人学校の規模としては比較的大きい部類に入ると思われる。

2.2 JJS の歴史

JJS の歴史について、概要は下記の表の通りである。

年	月	出来事
1969	5	日本国大使館付属ジャカルタ日本人学校開校式（在籍児童 11 名）
	11	第 1 回学芸会
1970	3	文集『みなみ十字』第 1 号刊行 第 1 回卒業式　小学部（男子 1 名、女子 1 名）
	5	中学部併設
	8	PTA 発足
	10	第 1 回運動会
	12	パン給食開始
1971	2	幼稚部入園式
1972	9	新校舎へ移転
1974	1	デモによる臨時休校 スクールバス運行開始
	5	第 2 号棟新校舎完成
1975	3	校歌・校章の制定
1976	10	国連デー記念行事参加
	11	親善野球大会
1978	6	新校舎へ移転
	10	図書館使用開始
1979	9	インドネシア共和国における国際学校として認可される グラウンド・プール開き
1980	7	日・イ友好キャンプ
1981	7	中学部校舎落成式
	9	日・イ友好凧上げ大会
	11	小学部学習発表会（この年より中学部文化祭始まる）
1984	9	無線塔取り付け（スクールバス用無線）

[10] 海外赴任 navi「海外学校事情（東南アジア）」,https://world.relocation.jp/appointed/childcare_education_guide05.html（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

	10	隣接海兵隊基地弾薬庫爆発により被災、3 日間臨時休校
1987	8	オラエトラボラ校一日体験入学（小 5・6）
1988	6	幼稚部落成式
1990	8	第 5 号棟校舎落成
1992	3	在外教育施設の認定等に関する規定（平成 3 年文部省告示第 140 号）の規定により、小学校、中学校の課程と同等の課程を有する在外教育施設として認定される
	6	全教室エアコン稼動
	8	スラマン日本語補習校へ巡回指導
1995	11	アジア大洋州地区日本人学校校長会（ジャカルタ会場）開催
1996	4	文部省より平成 8 年度から 3 年間「在外教育施設におけるコンピュータの活用法の研究」委嘱を受ける
	11	新校舎落成祝賀会
1997	4	文部省より平成 9 年度から 3 年間「国際教育・文化交流推進校」の指定を受ける
	5	総選挙運動における治安情勢不安定のため臨時休校
1998	5	ジャカルタ市内暴動のため学校に臨泊 インドネシア危機のため休校（26 日間）
1999	5	インドネシア総選挙に伴う臨時休校
	10	大統領選挙に伴う臨時休校
2000	4	文部省より海外子女教育研究「特殊教育の推進」の指定を受ける
2003	4	文部科学省より平成 15 年度から 3 年間「国際理解教育・文化交流推進校」の指定校に
2004	4	全日本女子バレーボールチーム来校、交流活動を行う
2005	4	町村外相令夫人学校訪問
2006	8	幼稚部新園舎移転式典
	9	全日本男子バレーボールチーム来校、交流活動を行う
2008	10	JFA こころのプロジェクト　宮澤ミシェル氏/川上直子氏来校、交流活動を行う
2010	9	国際校から外交団学校へステイタス変更（インドネシアでの扱い）
2012	11	アジア大洋州日本人学校校長連絡協議会（ジャカルタ会場）開催
2013	8	大相撲力士 3 名来校
	9	警視庁音楽隊来校演奏会
2014	6	土俵開き
	7	大統領選挙に伴う休校

2015	4	ラグビー元日本代表選手 2 名来校、交流活動を行う
	5	尾崎好美氏（マラソンランナー）来校、交流活動を行う
	12	統一地方選挙に伴う休校
2016	1	ジャカルタ中心部における爆弾テロ事件による緊急一斉下校、臨時休校
2017	4	ジャカルタ特別州知事選挙のため臨時休校
	9	大規模集会のために緊急一斉下校
2018	1	中学部２年 修学旅行２泊３日（ジョグジャカルタ） ※バリ島アグン山噴火のために行き先、時期を変更
	2	フィギュアスケート小塚選手来校
	6	統一地方選挙のために臨時休校
	11	公益財団財団法人日本武道館来校（武道演武）
2019	1	塚本勝巳氏来校
	5	大統領選挙結果発表に伴う緊急一斉下校、臨時休校
	9	日本人学校で初の教育実習生受け入れ
2020	4	新型インフルエンザ感染拡大のためインドネシア政府の方針のもと休校措置（～5 月 15 日）
	5	JJS で学習動画を作成、限定配信による学習指導
	8	Google Meet を活用したオンライン授業
2021	5	週 5 日のシミュレーション登校実施（対面とオンラインを並行するハイブリッド授業の実施）
	6	新型インフルエンザ感染拡大のためオンライン授業
	9	週 5 日のシミュレーション登校再開（ハイブリッド授業）

表２：JJS の歴史

（出所：ジャカルタ日本人学校「JJS の歴史」[11]より、一部抜粋して筆者作成）

この歴史から、JJS の特徴として以下の 2 点が挙げられる。

① 周辺の治安状況の影響を受けやすい

JJS はこれまでに、周辺地域の事件や政治運動の影響を受け、何度も休校措置や緊急下校を実施している。この点から、JJS の運営はジャカルタやインドネシア全体の治安状況によって大きな影響を受けていると言える。また同時に、生徒の安全確保は、保護者や教員の大きな課題として捉えられていると推察される。

[11] ジャカルタ日本人学校「JJS の歴史」,https://www.jjs.or.id/school-introduction/jjs-history（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

② 日本の著名人との交流の多さ

JJS は近年、日本のスポーツ選手をはじめとして多くの著名人を受け入れ、生徒との交流活動を実施している。日本の学校と同程度とまでとはいかずとも、JJS では校外の日本人との接触機会が積極的に設けられているといえよう。

2.3 JJS の設備

JJS の敷地面積は 79,192 ㎡で、3 階建て校舎 3 棟（小学部棟、中学部棟、管理棟）から構成されており、小学部・中学部ごとに運動場、体育館、プール、コンピューター室が設置されている。また全教室・特別教室・中学部体育館に冷房が完備されている。その他の主な設備については、土俵、テニスコート、JJS 資料館、図書室などがある[12]。

2.4 JJS の部活動

JJS のホームページによると、JJS で行われている部活動は以下の通りである。

サッカー	陸上競技	男子バスケットボール	女子バスケットボール
バドミントン	バレーボール	軟式野球	テニス
卓球	体操	水泳	ダンス
剣道	体力向上	ギター	吹奏楽
和太鼓	合唱	将棋・オセロ・百人一首	科学研究
美術	家庭科	日本伝統	パソコン

表 3 ：JJS の部活動一覧

（出所：ジャカルタ日本人学校「部活動」[13]より、筆者作成）

第 3 章　『みなみ十字』の分析

この章では、文集『みなみ十字』最新号の調査結果について述べる。

3.1 『みなみ十字』の概要

『みなみ十字』とは、JJS が開校した 1969 年から毎年発行されている作文集である[14]。本文集には、JJS に在籍する小学部と中学部の児童生徒が夏休みの宿題として書いた作文、

---

[12] ジャカルタ日本人学校「施設・設備紹介」,https://www.jjs.or.id/school-life/school-facilities（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

[13] ジャカルタ日本人学校「部活動」,https://www.jjs.or.id/school-life/extracurricular（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

[14] ジャカルタ日本人学校「みなみ十字」,https://www.jjs.or.id/education/minami-cross（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

そして在籍している教員や事務員などの作文が掲載されている。2023 年現在、全 54 号が発行されており、完成した『みなみ十字』は、年度末に全生徒に配布され、一般向けに販売などは行われていない[15]。

3.2 調査の対象

本論文では、『みなみ十字』の最新号である第 54 号に掲載されている、小学校 1 年～中学 3 年の作文を分析の対象とする。そして各作文が取り扱っているテーマを、3.3 に挙げる項目を基準として分類する。なお、扱っているテーマが複数ある場合、より中心的に記述が見られものをテーマとする。具体的には、作文の中で割いている文字数がより多い項目をテーマとする。

3.3 分類項目の定義

この分析においては、以下の定義のもとで作文の分類を行うものとする。

①学校：特定の学校行事ではない、学校での出来事、人物、経験に関する作文。
②運動会：JJS の体育祭に関する作文。
③宿泊学習：学校行事である宿泊学習に関する作文。なお、各学年で行事の呼び方や内容は異なるが、ここでは一括して「宿泊行事」として扱う。
④社会科見学：学校行事である社会科見学に関する作文。なお、各学年での見学先や内容は異なるが、ここでは一括して「社会科見学」として扱う。
⑤生活：インドネシアでの生活（食文化、行事、宗教、体験など）に関する作文。なお、日帰りでの外出（旅行など）も「生活」に分類する。
⑥国内旅行：インドネシア国内への旅行に関する作文。なお、行き先が特定できなかった旅行に関する作文は、「その他」に分類する。
⑦海外旅行：日本とインドネシア以外の国への旅行に関する作文。
⑧一時帰国：日本への一時帰国に関する作文。なお、日本での旅行も同様に「一時帰国」と分類する。
⑨趣味：自身の趣味（スポーツなども含む）に関する作文。
⑩家族：自身の家族（ペットなども含む）に関する作文。
⑪エッセイ：自身の出来事や経験だけでなく、そこから考えたことや主張などを含む作文。
⑫比較：インドネシアと他の国の（文化などの）比較を試みている作文。
⑬その他：上記のいずれの項目にも該当しないと判断した作文。

[15] K 先生への文書での質問調査より確認

3.4 分析結果

『みなみ十字』54 号のテーマ分析結果は以下の通りである。

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	中 1	中 2	中 3
学校	16	8	10	13	10	12	14	10	11
運動会	10	3	6	8	10	9	2	6	0
宿泊学習	0	0	0	0	5	0	0	0	0
社会科見学	0	0	1	5	0	1	0	0	0
生活	16	25	18	12	16	15	13	11	4
国内旅行	11	20	12	17	10	7	2	3	0
海外旅行	0	0	0	3	0	1	0	0	0
一時帰国	6	4	5	6	5	5	2	4	1
趣味	2	4	5	3	3	1	0	0	0
家族	0	2	1	0	1	0	1	0	1
エッセイ	0	0	0	2	1	3	1	6	6
比較	0	0	0	1	1	2	1	0	0
その他	3	2	0	2	1	1	1	0	1
計	64	68	58	72	63	57	37	40	24

表 4 ：『みなみ十字　第 54 号』　作文のテーマ分析結果

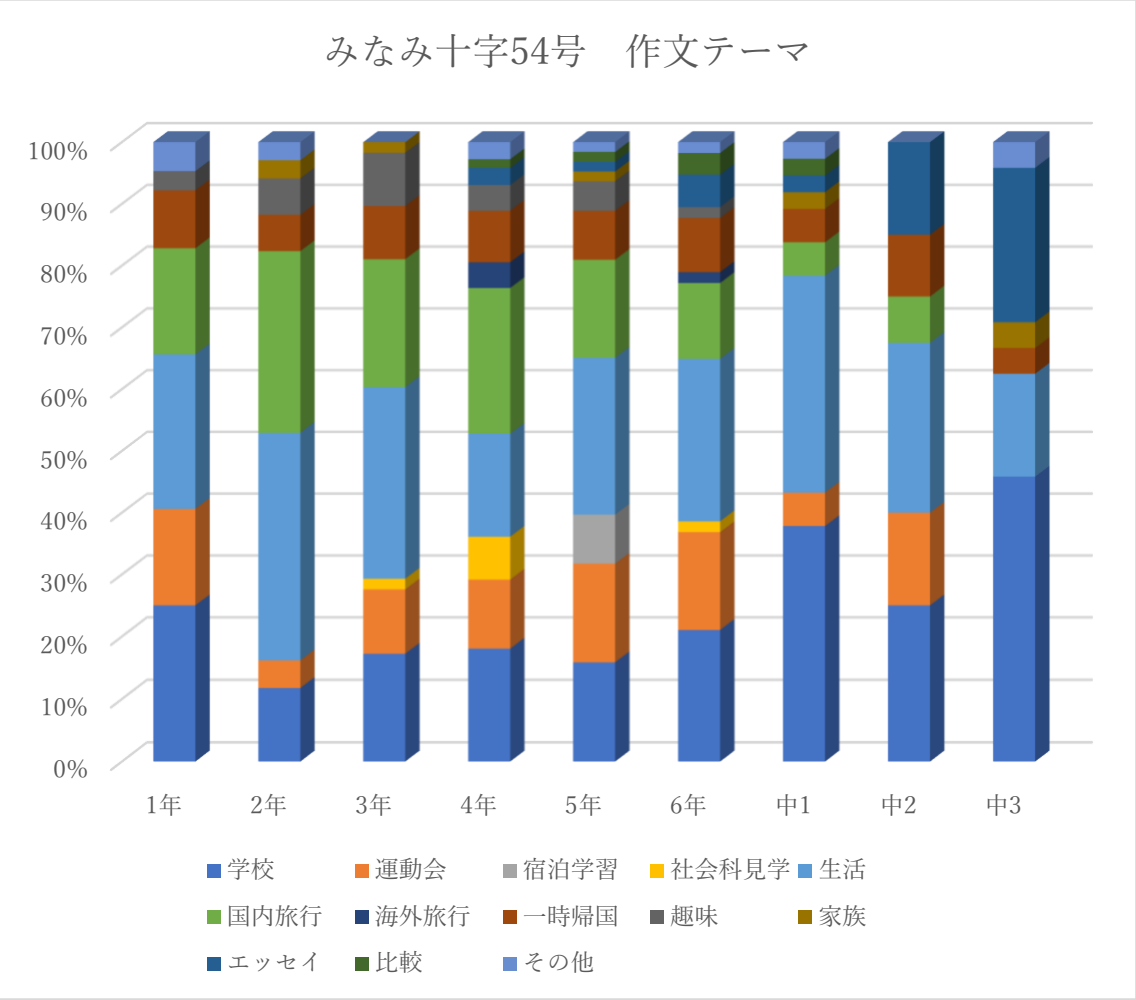

表５：『みなみ十字　54 号』　各学年のテーマの割合

（出所：表４調査より、筆者作成）

3.5 調査結果を経た考察

以下、この分析結果を通じて考察した内容を述べる。

① 「運動会」への関心の高さ

学校生活や学校行事を扱っている作文のみに注目すると、JJS の生徒は運動会についてふれている生徒の割合が多いことが見て取れる。この点から、JJS の生徒は、運動会により関心を持っていると予想できる。

その理由としては、生徒数の多さによる規模の大きさが関係しているように思われる。作文の総数は 483 人分であり、2.1 でも述べたように、日本人学校の中でも大きい部類に入るといえる。よって、JJS での運動会は規模が大きく、より多くの他学年と協働することができるため、より生徒の印象に残った出来事になっている可能性があるといえよう。

第 4 章で扱うインタビュー調査においても、特に教員や保護者にとって体育祭は JJS の行事の中でも印象的な行事として言及されている。この点も踏まえると、JJS における体育祭は、生徒/保護者/教員の 3 者すべての方面から支持されている行事であると考えられる。

② 「生活」への関心の高さ

各学年の項目の中で、「生活」は小 2、小 3、小 5 、小 6、中 2 においては最多であり、小 1 では「学校」と並んで最多である。この結果から、JJS の生徒は日々の学校生活と同様に、学校外の生活環境や文化に高い関心を持っていることがうかがえる。

③ 「宿泊学習」の記述の少なさ

『みなみ十字　第 54 号』によると、JJS で宿泊学習（修学旅行）が実施されているのは、小学校 5 年、6 年、中学 1 年、2 年、3 年である。そして小 6、中 2 の宿泊学習が実施されたのはそれぞれ 9 月、10 月で[16]、作文は夏休みの宿題であることから、それについて触れた作文がないのは当然のことである。しかし、中学校 1 年と 3 年の作文においては、宿泊学習はそれぞれ 6 月、5 月に実施されている[17]にも関わらず、それを中心として作文を書いているものは見られなかった。その一方で、中学 3 年を除き、各学年において「国内旅行」についての作文は見られるという点から、JJS の生徒たちの宿泊学習への関心のあり方について疑問が生じてくる。

『みなみ十字』には、児童生徒たちの作文に先立って、「2022 年度　JJS 写真集　想い出」として、学年ごとに行事の写真が掲載されている[18]。 特に小学部 6 年、中学部 2 年については修学旅行の写真をまとめたページがあるため、そこに掲載されている写真のタイトルとその補足を紹介する。

小学部 6 年

「水遊びしたよ！」（滝の近くでの集合写真）

「魚とったよ！～田植え体験～」（水辺での集合写真）

「学年レク」（ステージ上で出し物をする児童の写真）

「別班行動」（他の写真と合わせて考えると、インドネシアのバンドンにある世界最大級の屋内遊園地であるトランススタジオ[19]内での生徒の写真と思われる）

「トランススタジオ」（トランススタジオ内での集合写真）

「ダンスレッスン」（児童が屋外でダンスをする写真）

「キャンプファイヤー」（児童が屋外でキャンプファイヤーを囲む写真）

---

[16] ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』,p.295.

[17] 同上

[18] ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』,p.35~65.

[19] ダリマナ、「【インドネシア】バンドンにある巨大屋内遊園地『Trans Studio Bandung』を訪れた。」,2018 年 9 月 3 日,https://darimana.net/bandung-transstudio/ （最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

「タンクバンプラフ火口」（山を見学する児童の写真）
「足湯体験」（屋外の足湯を利用する児童の写真）
「アンクルン演奏」（インドネシアの伝統的な楽器であるアンクルンを持ち、演奏をする児童の写真）[20]

中学部 2 年
「空港の前で」（インドネシアのバリ島にある、デンパサール国際空港のモニュメント前での集合写真）
「棚田の前で（1 組）」「棚田の前で（2 組）」（棚田を背景にした、各クラスの集合写真）
「タートルアイランドにて」（バリ島にある小さな動物園のような施設であるタートルアイランド[21]での集合写真）
「ココナッツジュース」（ココナッツジュースを持った男子生徒の写真）
「ガムラン演奏」（インドネシアの伝統的な楽器であるガムランを演奏する生徒の写真）
「バリの衣装」(バリ島の伝統的な衣装を腰に巻き付け、飾りを上に掲げた女子生徒の写真)
「バティック体験」（インドネシアの伝統工芸品であるバティックの模様を描く生徒の写真）
「船で移動」（船の中で撮影された生徒の集合写真）
「蛇と一緒に」（蛇を首周りにかけている男子生徒の写真）
「値切り中」（街角で露店の店員と会話する生徒の写真）[22]

中学部 1 年の修学旅行の写真も同様に掲載されているが、具体的なプログラムについては説明がなかった。しかし、上記の 2 学年のプログラムを踏まえると、他学年の宿泊学習も同様に、インドネシアの自然体験や伝統文化の体験を中心としたプログラムだったのではないかと考えられる。

上記のプログラムは、行き先や体験内容は異なるものの、自然や伝統文化に触れるという点で、日本の学校が実施する修学旅行の内容と大きな差異はないように思われる。しかし、この行事を中心に記述した作文がない一方で、各家庭で実施された旅行の思い出について触れる作文はあることから、同じ旅行形式の出来事であっても、特に修学旅行は関心が向けられていない、あるいは相対的に生徒の印象に残っていない可能性がある。

インタビュー調査に協力いただいた JJS の K 先生によると、小学部 6 年生においては、修学旅行で訪れるバンドンに関わって、バンドン会議の議場見学、ゴアジャパン・ゴアオ

---

[20] ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』,p.60-61.
[21] Trip.com「タートルアイランド」,https://jp.trip.com/travel-guide/attraction/bali/serangan-turtle-island-homestay-10522488/　（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
[22] ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』,p.62-63.

ランダ見学を通して世界平和について考える学習を実施している[23]。このような歴史学習は、レジャー系のイベントが多く含まれるであろう家族旅行では実施される可能性が低いと考えられる。つまり歴史学習は、修学旅行にあって家族旅行にない要素であると推測できる。この点から、JJS の生徒は、学校で実施されるインドネシアの歴史学習に関しての関心がやや低い可能性がある。

ただし、生徒による自発的な歴史学習は、作文の中で触れられているものがある点を指摘しておきたい。例えば、小学部 5 年生の作文の中には、以下のような記述をするものが見られた。

みなさんは、八月十七日が何の日か知っていますか。そう、インドネシアの独立記念日です。その日、ぼくが住んでいるマンションでは、独立を祝うイベントがあり、色々な国の人が四十人近く集まって、（中略）独立にちなんだゲームをして遊びました。中でも一番もりあがったゲームは、サック・レースで、大きなお米のふくろ（サック）に両足を入れてジャンプしながら、だれが一番早くゴールできるか競うゲームでした。独立戦争が終わり、服の代わりに着ていたサックを着なくても良くなったので、みんなうれしくてそのサックをふみつけて喜んだことから、今でも、このゲームが行われているそうです。（以下省略）[24]

この作文では、自身のマンションで実施された独立記念日のイベントにおけるゲームを通じて、インドネシアで起きた独立戦争について間接的に学びを得ている。このような作文が見られることから、JJS の生徒はインドネシアの歴史や文化に全く無関心というわけではないと推測される。②で述べたように、普段の日常生活についての作文は多くあり、中にはインドネシアの文化について触れているものも見られる点からも同様のことが言えよう。

すなわち、JJS の生徒は自身の経験として認知したインドネシアの歴史や文化は印象に残っている一方で、学校で受動的に学ぶ知識としての歴史や文化にはそれほど関心が向いていない可能性がある。

3.6 『みなみ十字」の調査において留意するべき点

ただし、ここまでで調査の対象とした作文の内容については、提出前に保護者が目を通している点に留意しておきたい。

インタビュー調査に協力いただいた Y 先生によると、『みなみ十字』の作文を提出する際には、事前に保護者に確認してもらうように教員から指示をしている。また、断定はできないものの、「この作文は保護者が一部書いているのではないか」と教員間で話すこともあっ

---

[23] K 先生への文書での質問調査より確認

[24] ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』,p.187.

たという[25]。これらの点から、『みなみ十字』は生徒関心のありかを完全には反映できていない可能性があると言える。

3.7 『みなみ十字』の調査についての総括

この章では、『みなみ十字　第 54 号』の作文を、テーマを基準に分類することで、JJS の生徒の関心のありかを探った。体育祭や普段の学校生活には高い注目を示す一方で、それらと比較すると修学旅行という一大行事には関心をあまり示していない点から、JJS の生徒は自身の生活に関連する出来事には強く関心を持つ一方で、現地の歴史や文化など、日々の生活に直接関連している実感が持ちにくい分野については興味を持ちづらい可能性があるのではないかと筆者は考察する。

第 4 章　元 JJS 生、保護者、教員へのインタビュー調査

ここでは、元 JJS 生、その保護者、そして現在 JJS に勤める教員に対して実施したインタビュー調査について、その内容を示すのと同時に、JJS の教育がそれぞれの目線からどのように捉えられていたのかを考える。

4.1 インタビュー調査の実施方法

2023 年 8 月～12 月にかけて、いずれも zoom 上でインタビュー調査を実施した。なお、一部インタビュー調査とは別に、文書で質問を送信し回答を得ている箇所がある。

4.2 元 JJS 生、保護者へのインタビュー調査の結果

以下、それぞれのインタビュー調査において、筆者が特筆すべきと判断した内容について述べる。

4.2.1 保護者へのインタビュー調査：O 氏の場合

O 氏はインタビュー当時 56 歳の元駐在員である。2009 年 1 月～2012 年 7 月に妻、当時中学生の娘、そして幼稚園～小学生の息子 3 人とインドネシアに滞在していた。

・JJS のデメリットについて聞くと、O氏は長女が中学生のとき、部活をあまりやっていなかったことを挙げた。

O氏は長女の JJS で、「なかなか高校での部活で主になる」ような経験ができていなかったのではないかと考えている。つまり、日本の高校における部活動で中心となって活躍するための経験を JJS では積むことができず、高校で初めて本格的な日本の部活動に参加した長女に「出遅れた感」があったとしているのだ。

JJS では小学部 5 年から中学部 3 年が部活動に参加でき、週に 2 日、放課後に活動を行っ

[25] Y 先生へのインタビュー調査より

ている。しかし、「他校との交流は全くない」ようで[26]、日本の学校のように大会やコンクール、あるいは他校との合同練習や練習試合を実施することが難しいと推測される。そのため、日本の学校の部活動において日々の活動に注力する目的となるはずの行事が存在せず、活動に意欲的に参加する環境を確保することが難しくなっていると考えられる。

JJS で実施されている部活動は 2.4 で示した通りであり、種類の豊富さは十分確保されているように思われる。しかし、優勝を目指して熱心に練習に取り組んだり、外部の学生と部活動を通じた交流ができないことから、JJS の生徒が帰国後、日本での部活動を経験してきている生徒たちと比べて出遅れてしまう、あるいは気おくれしてしまうのではないかと考えられる。

・海外生活について質問すると、子どもたちは「もう 1 回インドネシアに行きたいっていう感じでもない」と話した。日常生活を介して異文化を見られたのは良かったとしたものの、「街中でのいい経験がなかった」のではないかと O 氏は振り返る。

その例としてO氏は日本人祭りに行った時の経験を挙げた。家族で祭りを見に行った際、日本人が珍しいためか、周囲の現地人に自分たちの写真を撮られることがあったという。特に下の子供 3 人は幼いこともあってショックだったのか、子どもたちは帰国後しばらく「写真を撮られるのが嫌」になってしまったそうだ。

その一方で、海外生活のメリットに関しては、「海外（インドネシア以外の国）に興味を持った」側面は見られるようだ。具体的には留学の希望、海外移動への慣れ、海外アレルギーの薄まりなどは感じられるという。ただ、基本的には同じ会社の日本人が多く住むマンションが生活拠点になるので、異文化との接触は少ない方だったのではないかとO氏は考えている。しかし、「旅行先で現地の文化に触れたりしているので」それについて不満がある訳ではない、とも述べている。

この発言から、異文化との接触に対する駐在員家庭の姿勢が垣間見える。保護者たちの中には共通して、インドネシアに来ているからには子どもたちに異文化に触れさせる機会を設けようとする意思が見られる。しかし、その環境は学校に頼るだけではなく、旅行などといった形で自分たちで用意することも考えているのだ。多くの先行研究は、学校と保護者が協働して子どもたちに異文化に触れさせ、国際意識の豊かな人材を育てるべきだと主張している。例えば山田（1996）は、日本人学校が現地校や国際学校との交流活動を行ったり、地域の行事に参加したり、学校行事を地域社会に開放していくことは、現地社会に日本人学校を正しく理解してもらうだけでなく、児童生徒が体験的な活動を通して国際性を身に着けていくことからも、積極的に進めることが必要だと主張している[27]。すなわち、より実践的で

---

[26] K 先生への文書での質問調査より確認

[27] 山田久仁夫「海外子女教育と日本人学校」，文部省海外子女教育研究会『日本人学校教師ガイド』,株式会社時事通信社, 1996 年,p.12.

双方向の異文化交流が必要だとしているのである。

一方で、実際に日本人学校に子どもを通わせる親にとっての「異文化交流」とは、佐藤(2019)が「表面的な理解にとどまり、相互理解や違いを認める寛容性などの異文化間能力の育成につながっていない」と批判している、3F(fashion・food・festival)と形容されるような異文化理解[28]に該当するといえる。先行研究ではそれが問題であるとされている一方で、当事者である保護者からすれば、自分たちが求めている「異文化交流」はJJS、そしてジャカルタでの生活の中で既にある程度達成されており、不満は特にないのである。

4.2.2 保護者へのインタビュー調査：M氏の場合

M氏はインタビュー当時51歳の元駐在員である。2013年1月～2015年の間、妻と小学生の娘2人とインドネシアに滞在していた。

・帰国後のマイナス面について聞くと、娘はモチベーション/やる気のギャップに苦労した様子だったとM氏は振り返った。JJSでの生活を通じて勉強する習慣がついた一方、帰国後通った公立中学では「そんなに勉強しなくていい雰囲気」があったという。特に英語については、本人からするとJJSで頑張ったので成績が良いのは普通のことだが、日本サイドからすると「それで当たり前なんでしょ」「帰国子女だから」というような目線を向けられ、それが子どものプレッシャーになったのではないかと考察している。

このエピソードから、日本人学校が国際的なカリキュラムを取り込むことに対する問題点が浮かび上がってくるように思われる。海外にあるという日本人学校の利点を活用し、外国語学習や異文化理解といった科目を多分に取り入れると、日本での友人関係に苦労する可能性があるのだ。

松尾(2013)は、外国人（特に外国人の子ども）に対して日本人が、①差異を本質化するまなざし、および②差異を個人化するまなざしといった2つのまなざしを向けていることを「日本人性」（＝日本人であること）という概念を前提に指摘している。

「日本人性」とは、日本人/非日本人のシステムによって形成されるもので、日本人のもつ目に見えない文化実践、自分や他者、社会をみる視点、そして構造的な特権から構成されると松尾は説明している。

まず①については、全てをルーツに還元し、差異を本質化するまなざしを指す。日本人の中では、自分たちと外国人を二項対立的に位置づけ、日本人とは異なる一枚岩的な実体を持つ存在として外国人を見る姿勢が形成されているという。このまなざしにより、彼らの行為は個人の差異の存在や心情の動きなどを考慮されないまま、異なる文化に帰するものという単一の解釈がなされてしまう傾向にある。結果、すべてが文化の問題に還元されてしまい、日本人と外国人の間に越えられない境界が創り出されるのだ。

---

[28] 佐藤郡衛『多文化社会に生きる子どもの教育―外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』,株式会社明石書店,2019年,p.96-116

また②は、全てを個人の問題に帰するものと考え、差異を個人化するまなざしのことである。社会はメリトクラシー（能力主義）が機能しているとして、文化的な差異は本質化されるものの、その差異が意味ある違いとは捉えられないため、差異として見られないことになる。そのため、日本文化のルールは認識にのぼらないまま、すべての個人に同様の取り扱いがなされることになる。

例えば日本の教育の特徴（一斉指導、集団への同調的行動の要求、個人としての意思決定機会の少なさ、厳しい学則など）は当たり前のこととされ、文化的な障壁として問題視されることは少ない。外国人の子どもには「日本人の子どもと等しい教育機会が付与されている」という理由で、文化の違いがもたらす課題も個人的な差異に還元され、彼らの抱える問題は全て本人の努力の問題として捉えられることになる。

重要なのは、これら２つのまなざしが、マジョリティである日本人の都合によって選択されることである。一方で、マイノリティの視点は常識に合わない例外として見なされ、その声が取り上げられることはほとんどない。意識されない日本人性に由来する自文化中心主義のパースペクティブによって、マジョリティにアクセントを置いた形で意思決定が自然に行われてしまうのである[29]。

松尾はこれら２つのまなざしが「日本人：外国人（の子ども）」という構造の中に向けられていることを指摘しているが、筆者はこのまなざしが、「日本の学校で育った子ども：日本人学校出身の海外帰国生」という枠組みにおいても見られるのではないかと考える。すなわち、「英語ができて当たり前」という日本の学生の姿勢は、彼らがＭ氏の娘を単に「海外帰国生」という枠組みで認識し、彼女自身の努力やこれまでの環境といった背景にまで目が向かない、あるいは向けようとしていない故のものだと解釈できる。また同時に、日本の教育の特徴（≒生徒の勉強へのモチベーション）については問題であるという意識にはならず、自分たちの現状を省みるまでに至っていないのである。

・海外で過ごしたデメリットとしては、「デメリットとまではいかないが」とした上で、娘が「人を信じやすい」性格になったことを挙げた。「良い人に囲まれて生活したからこそ」、その反動で変化があったのではないかとＭ氏は考察している。海外での生活を通じて用心深くなった面もあるが、「それなりにこなしたことで人への許容範囲がゆるい、人を信じすぎる」側面があると感じている。しかし、JJS に対しての不満は「基本的にはない」としていた。

---

[29] 松尾知明「多文化共生社会の実現に向けて―日本社会の脱構築と再構築のプロセス―」,松尾知明『多文化教育をデザインする　移民時代のモデル構築』,株式会社勁草書房,2013年,p.231-237.

4.2.3 保護者へのインタビュー調査：K 氏の場合

K氏はインタビュー当時 49 歳の元駐在員である。2010 年 11 月～2012 年 7 月の間、妻と当時幼稚園生の娘とインドネシアに滞在していた。

・JJS と日本の違いについて尋ねると、「(JJS の方が) 合わない人がいなかったような」気がするという反応があった。その理由は、生徒の親の大半が駐在員であり、環境が近しいためではないかとK氏は推測する。

主に 4.3.2 で詳しく紹介している JJS の Y 先生は、日本の学校の生徒と JJS の生徒の違いについて、JJS に着任する前に勤めていた群馬県の高校と比較して、以下のように述べている。

（前略）家庭環境が少し複雑な家庭や、それにより問題行動や友達とのトラブルなどは日本の学校の方が多いと思います。その点、 日本と比較して JJS はすごく平和に過ごせる環境が整っていると思います。この違いは、海外駐在の家庭と比較すると日本の学校は共働きの家庭がほとんど（群馬の場合）であること、JJS が私立学校であることなどからくるものかなと感じます[30]。

Y 先生は、日本の学校に見られる家庭環境として、共働きという形態の存在を指摘している。つまり JJS の場合は、どちらか 1 人だけが働いている駐在員家庭が多いということだろう。実際に駐在員妻のブログでは、日本に住んでいた際には働いていたものの、夫のインドネシア転勤に伴って休職や退職した経験を綴っているものがあった。

例えば、以前インドネシアに駐在しており、子どもを JJS に通わせていた女性のブログには、以下のような記述がある。

私は仕事を休職して夫の転勤に帯同しました。休職制度ができたばかりでありがたかったのですが、当時は仕事を辞めてきた人も多かったため、初めは「休職中（日本に帰れば元の職場に戻れる)」ということは周囲には黙っていました[31]。

ブログの投稿が 2020 年であり、同ブログ内で「帰国して 2 年がたちますが」という記述がある点から、この女性は 2018 年ごろにインドネシアに駐在していたと考えられる。

日本の一般的な学校においては、小学校に在籍する生徒の主な共通点は居住地である。家庭の境遇や、保護者の勤務先は必ずしも一致しない。一方で JJS では、居住地については保

---

[30] Y 先生への文書での質問調査より確認

[31] YUNA「ジャカルタ(インドネシア）で駐在妻していました」，2020 年 7 月 7 日，Hatena Blog， https://taky16.hateblo.jp/entry/2020/07/07/173255（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

護者の勤める会社ごとにほぼ一緒になる場合が存在する。会社ごとに駐在員が住むマンションが決まっていることが多いようだ。そのため、同じ会社の居住地は一緒であっても、他の会社の家庭とは大きく離れていることもある。しかし、多くが「駐在員の家庭である」という点は一致している。そして一般的に駐在員は、日本の会社で比較的活躍している社員の中から選抜される。そのため、日本人学校に子どもを通わせている家庭の収入（≒経済水準）や家庭環境のレベルは比較的高くなると予想できる。そのような背景があるために、日本の方が「合わない人」が存在していたり、会う人にばらつきがあるのではないか、という指摘がK氏から出たと筆者は解釈している。

・日本人が過ごす・育つ場としてのインドネシアについては、「インドネシアの人は親日」であり、生活する上で良かったと言う。インドネシア人は自分の文化を教えようとしてくれるため、子どもに経験させたいことがその通りに実現できたのが好印象だったようだ。

4.2.4 元 JJS 生へのインタビュー調査：K・M 氏の場合

K・M 氏は、4.2.3 で紹介した K 氏の娘であり、現在 17 歳の高校生である。当時 JJS の幼稚部、小学部に通っていた。

・生徒の印象について聞くと、フレンドリーで明るい点、積極的に喋りかけてくれる点を挙げた。日本の学校の場合、ほとんどの生徒が同じ地域で育っているため、転校生は珍しがられるものだったと振り返る。日本の学校では「みんな幼稚園から一緒」であるため、転校生はその環境に馴染むのに苦労したのではないかとしている。一方 JJS の場合、大半の生徒が国をまたいできているため転校が珍しくない。進級や新学期のタイミングに合わせて、多くの生徒が転出入しているのが日常的であるため、新しく転入してきた生徒を暖かく受け入れる土壌が整っているのではないかと考えられる。

・海外生活のメリットについては、海外に対して身近な感覚を持てている点を挙げた。「日本だと海外へのハードルが高い」が、日常的にお手伝いさんやドライバーと触れ合っていく中で、少しずつ外国人との接触を持てたことが要因としてあるのではないかとしている。またK・M氏は、元々自身が人見知りをする性格であったが、インドネシアに行くことでそれが「開けた」ような感覚があったと振り返る。その理由としては、親との物理的距離が離れたことにあるのではないかと本人は考察している。日本の学校は、住所に基づいた学区の区分のもと小学校や中学校が指定される。一方 JJS の場合は、「学区の設定はありません。しかし、認識としてバス通学が基本ではなく、保護者の送迎を基本としています。（安全確保のため）スクールバスは、あくまでも補助的な役割です。（現実問題として、毎日送迎できる保護者は限られるため。）児童生徒の平均通学時間は、朝…３０～４０分、帰り…１～１．５時間です。雨が降ると＋３０分です[32]」という回答を K 先生より受けている。K・M 氏に

[32] K 先生への文書での質問調査より確認

限らず、JJS に通う生徒の多くは長時間の通学を経験することになるのだ。K・M 氏はそれをきっかけに、日本では近くにいた母親から離れ、遠くの学校に通うことを通じて、「自立しよう」という気持ちになれたのではないかとしている。

4.2.5 保護者へのインタビュー調査：S 氏の場合

S 氏はインタビュー当時 53 歳の元駐在員である。2007 年 5 月～2010 年の間、妻と小学生・幼稚園の息子とインドネシアに滞在していた。

・JJS の教育については、「(生徒に) 与える経験を、先生が一生懸命工夫していた」と話す。覚えている具体例を尋ねると、遠足、トゥクトゥク（恐らく三輪タクシーであるバジャイのことだと思われる）の乗車体験、民族衣装を着ての写真撮影、シンコン（キャッサバ）の栽培など、「インドネシアならでは」の行事を挙げた。

その中で最も印象に残っていることとしては、「運動会」があがった。「中学生が面倒を見て、一緒にやるっていうのは日本だとできないいい経験」だと言う。

JJS の体育祭では、小学校 1 年から中学校 3 年までの計 9 学年が合同で参加する。その際は各クラスの中で赤組、青組、白組とチームに分かれて点数を競い合う。特徴的なのは、当日のプログラムの一つである「応援合戦」であろう。本番までに、中学生と小学校高学年の有志により編成された応援団が中心となって、応援パフォーマンスの練習を積み重ねるのだ。その際には、中学生と小学生の交流などが特に盛んに行われる。小学校高学年の生徒が昼休みに小学 1 年生の教室に向かい、応援練習の指導を行う光景が日常的に見られる。また当日も、各組が学年の垣根を越えてチームメイトを応援する光景が見られる。そのような光景を見て、S 氏は「幅広い世代と交流ができるのはいいこと」だと、体育祭を肯定的に解釈した。

ただし、Y 先生は 9 学年合同での実施についてのデメリットとして、「様々な世代と関われるのはいいことだと思いますが、1 年生などの低学年が中 3 の指示やクオリティ、体力についていけてない部分もあったと感じました[33]」と述べている点に留意しておきたい。

・日本人学校の閉鎖性について意見を求めると、「インターナショナル（校）よりは交流は大分少ないとは思うが」とした上で「インターナショナルに行くからといってそれはどうなのか」と疑問を呈した。というのも、「(インターナショナルは) 万国共通なのに」わざわざインターナショナル校に通わせることに意味があるのか、という考えがあるという。S 氏としては、「インターナショナルは世界基準」であり、インドネシアならではの体験とは言えないと考えているという。インターナショナルスクールの様相や環境はどの国のものであっても大差はなく、新しい文化や習わしとの接触という観点において、「本当に現地ならではの経験をするためには、現地に行かないと」意味がないのではと述べた。

---

[33] Y 先生への文書での質問調査より確認

一方で、現地校への編入は「先進国ならできるだろうけど」、「インドネシアでは難しい」としている。その理由としては、現地校の教育のレベルが分からないことや、親の言葉（日本語）が通じない点などを挙げ、「ちゃんとした小学校を探すこと自体が難しい」としている。

ここでも、駐在員家庭のインドネシアでの生活に対する姿勢がうかがえる。駐在員家庭にとってインドネシアでの教育の目的は、日本の学校と同質の教育を子どもに施し、帰国後日本での生活を無理なくこなせる状態にすることにある。現地での異文化との接触も当然滞在中の目標の一つにはなっており、その意識が高まっている可能性は大いにあるが、あくまで滞在生活の副産物的な位置として捉えられていることに変わりはない印象を筆者は受けた。この基準においては、異文化との接触は日本と同等のレベルの教育の確保よりも優先度はまだまだ低いのである。

4.2.6　元 JJS 生へのインタビュー調査：S・H 氏の場合

S・H 氏は、インタビュー当時 24 歳の元 JJS 生であり、S 氏の息子である。小 2 ～小 4 の時期に、JJS に在学していた。

・JJS で苦労したことについて尋ねると、生徒同士が同じ日本人でありながらも出身環境が異なっていたことを挙げた。具体的には、方言が通じないために人間関係に苦労するということが転入時から転出するまで続いたという。日本では成立していたコミュニケーションが通じないため、意思疎通に関してエラーが発生することが時折あったようだ。一般的な日本の小中学校では、住んでいる地域や言語（方言）などは比較的共通しているが、JJS の場合は日本各地からの駐在員家庭が集まるため、日常生活でのコミュニケーションに苦労することがあったと考えられる。S・H氏のように、生まれ育った地域の小学校に通う低学年の時期において、自分の言語や方言の特殊性を認識することは難しいだろう。そのため、自分の言語の特異性に早期から気づけることも、日本人学校での生活がもたらす効果の一つであると解釈できそうだ。

この要因もあって、生徒の印象については「まとまりのまの字もない」ものであったと S・H氏は振り返る。生徒たちには一体感がなく、周囲は「個性の塊だった」と振り返る。本人はその要因について、日本にいる時に「住んでた地域がバラバラだったのがでかい」のではないかと考えている。

・海外生活のデメリットについては、弟（後述の S・S 氏）が「言語が大変そうだった」点を指摘した。そして、海外で教育を受ける目的が異文化学習であるなら、日本で人格・言語形成を完了させ、帰国後も合流できるコミュニティをつくってからの方がいいのではないかと言う。

この点から、やはり駐在員家庭の目的意識がある程度共通していることが理解できる。当事者たちにとっては、海外での生活における目標は帰国後の生活にある。帰国後、スムーズ

に地域の学校に適応し、差をつけられることなく教育を受けていけることが前提なのである。海外帰国生に対して、今後の日本の発展に貢献する人材としての期待を一部からかけられている一方で、当事者である子どもたちはそれ以前に自身の環境の変化に適応し、その後の生活を苦労せず送ることの方が優先度の高い課題なのである。

・異文化との接触については、「小学生ならあれで十分」であり、「あれ以上だとやりすぎ感」があるという考えを示した。理由は「外に出るリスクが高い」ためで、「先生が大変」だろうとし、教員側の苦労を察している様子であった。従来通り、「週 1 の座学（インドネシア語の授業など)、年 1 の学校訪問、稲作、文化体験というスパンで十分ではないか」という。

筆者はこの発言は、子どもが持つ異文化を受容するキャパシティの存在を指摘したと解釈している。4.2.1 で触れたように、先行研究では日本人学校において、地域の行事に参加したり、学校行事を地域社会に開放していくことを、積極的に進めていくことが必要であるとされている。しかしそれらの主張においては、子どもたちが外部と接触する頻度や回数については詳しく触れられていない。異文化に触れ、それを自分なりに解釈、比較するためには、子どもたちには時間が必要なのではないだろうか。

JJS での多文化共生教育に関して、K 先生は以下の学校行事を提示した。以下、K 先生からの返答を掲載する。

小学校 1 年・・・カリヤワンさんとの交流
（カリヤワンさんのお仕事を体験し、大変なことや仕事の喜びについてインタビューをし、学習の成果を劇にして JJS フェスで発表）
小学校 3 年・・・まちたんけん
（2 日間にわたって、学校周辺のまちを徒歩で探検。特筆すべきはモスクに入れていただき、イスラム文化に肌で触れる経験。）
小学校 5 年・・・環境
（企業の協力を受け、マングローブの植樹体験や TOYOTA 工場見学、ジャカルタ漁港見学を通して SDGs について考えを深める学習を展開。）
小学校 6 年・・・歴史
（修学旅行で訪れるバンドンに関わって、バンドン会議の議場見学、ゴアジャパン・ゴアオランダ見学を通して世界平和について考える学習。）
中学校・・・世界との関係
（大使館訪問や G20 等国際会議の意義を知り自分の考えをもつ、現地の高校との交流を通したキャリア学習 ※現地の生徒たちの進学事情などを知る、日系企業の職場体験を通した世界を舞台にしたビジネス戦略についての学習。そしてそれらを総合して J フェスで発表。）

なお、文中の「JJS フェス」「J フェス」とは、JJS での文化祭に相当する行事を指す。

K 先生は、以上の例を示した上で、多文化共生教育を「生活科や総合的な学習で」実施し、「積極的に推進」しているとコメントしている[34]。4.2.1 でふれた、佐藤が指摘している 3 F の観点と照らし合わせると、小学校 2 年の果樹園見学、小学校 3 年のヤクルト工場見学、小学校 5 年の漁港見学などは食文化（food）、小学校 6 年の伝統楽器の練習は間接的に現地の祭事（festival）に当てはまると解釈できる。しかしその一方で、小学校 1 年でのカリヤワンさん（インドネシア人の事務スタッフ）との交流は、学校をサポートする業務や人の存在を学ぶのと同時に、現地人である学校職員とのコミュニケーションを通じた相互理解を深めることが可能であろう。3 F に該当する行事が多いのは否めないが、これ以上本格的な接触を交えた学校行事を導入することは、前述したように最優先事項のひとつである生徒の安全確保を脅かすリスクがある上、保護者からのニーズとは一致していない可能性がある。

・JJS に求める改善点については、「強いて言えば」とした上で、校内の「風通しを良くすることはできない」点を挙げた。日本の学校のように、外部や他校との交流を頻繁に設けることが難しい点を指していると思われる。しかしその対策としては、「先生が入れ替わることで実現」できるのではないかと述べていた。

4.2.7 元 JJS 生へのインタビュー調査：S・S 氏の場合

S・S 氏は、インタビュー当時 19 歳で、先述の S・H 氏の弟である。幼稚園から小 1 までの時期を JJS で過ごした。

・海外生活について尋ねると、日本への帰国が「異文化というか、ちょっと違うところにきたくらいの感覚」であったとふり返る。「今思うとけっこう文化に触れていたなと思う」が、当時は自身の環境に特別感を抱くことはなかったそうだ。

・本人曰く、「第一言語が形成される時期にインドネシアにいた」ため、言語の発達に遅れがあったという。日本に帰国後、周りよりも言語の定着が 1 ～2 年遅れていたことが馴染めない要因になったと認識している。自分の中では日本語を分かっているつもりであるが、周囲の発言内容が「なんか理解できない」瞬間が度々あったと振り返る。

・異文化との接触機会の量について尋ねると、「何もかもが初めてなので、学校でけっこう触れられていた」としたうえで、「あれ以上だとパンクする」のではないかと考察していた。

多くの先行研究では、多文化共生を促進するための手法やその取り組みについて、より近距離で異文化と接触し、相互理解を深めることを目指すべきだといった旨の主張が多くみられる。例えば佐藤ら（2020）は、日本人学校に元来からある「将来帰国して日本で学習する際に困らないこと」が目的とされていた教育のあり方を転換する必要があると主張して

[34] K 先生への文書での質問調査より確認

いる。その上で、多様な文化を実体験できるといった強みを活かし、日本人学校を、日本の学校を後追いする「日本に準じた学校」ではなく、グローバルかつグローカルに活躍できる次世代を育てる学び合いの場としての「グローバル時代のフロンティア」に転向することを提案している[35]。

確かに佐藤らが指摘する通り、海外での生活を通じて日本を相対化して見られることや、多様な異文化を直接体験していることは、海外で学ぶ日本の子どもたちの強みであろう。しかし、S・S 氏の回想は、先行研究が唱える多文化共生教育に対しての、生徒の視点の欠落を示しているとは考えられないだろうか。社会全体の発展という観点において、子どもたちにより多くの異文化との接触機会を設けることの重要性は繰り返し述べられてきている。確かに今後の共生社会において、「グローバル時代のフロンティア」での経験は将来的に有益なものとなる、とする点には、その定義や詳細が定かではないこともあって概ね問題はないと言えるかもしれない。しかし、子どもたちが成長し、グローバルに活躍できる将来を迎える以前の、日本での生活については、先行研究では軽視されているように思われる。日本人学校での経験によって、日本の学校で育った生徒たちとの間に生じる摩擦が日本人学校出身の生徒にもたらす影響を考慮すると、日本の学校におけるカリキュラムと乖離している多文化共生教育を積極的に導入し、異文化に子どもを必要以上にさらすことは、その生徒の帰国直後の生活に影響を与えかねない点を軽視することに繋がるのではないかと筆者は考えた。

4.2.8 保護者へのインタビュー調査：S・A 氏の場合

S・A 氏は、前述した S 氏の妻である。

・日本の学校との違いについて聞くと、転入前に学校説明会に参加した際の話があがった。授業数について説明する際、「インドネシアのカレンダーに基づいて運営するが、日本と同じようになるようにこういう工夫を…」という説明があり、「日本から来る人、日本へ戻る人に対応」していたとふり返る。事前に教育方針に関して説明があったからこそ、それに対して不満を持つことはなく、むしろ JJS に対して「先生やカリヤワンさんに感謝の気持ちしかない」とコメントした。

・JJS についてふり返る中で、JJS には「南国特有の雰囲気」があったという。具体的には、「行事や授業を楽しもう」というマインドがあった点を指摘していた。その要因について心当たりがないか尋ねると、「せっかく海外なんだから」という特別感が働いているのではな

---

[35] 佐藤郡衛,中村雅治,植野美穂,見世千賀子,近田由紀子,岡村郁子,渋谷真樹,佐々信行「新たな教育の方向性」, 佐藤郡衛,中村雅治,植野美穂,見世千賀子,近田由紀子,岡村郁子,渋谷真樹,佐々信行『海外で学ぶ子どもの教育－日本人学校、補習授業校の新たな挑戦』,株式会社明石書店,2020 年,p.198-204

いかとしている。

・子どもはシャイな性格だが、帰国後のある日、「外人が地図見ていたからどこに行きたいのか聞いた」と子どもが話したことがあったという。この経験について S・A 氏は、JJS やインドネシアの経験おかげで外国人に声をかけられたと考えている。子どもたちが異文化とより近くで接触し続けたことで、外国人への抵抗が薄くなったと感じているのだ。

・日本人学校の閉鎖性について説明すると、「言われてみれば」とした上で、現地の人々との交流はなかったようにも取れるかもしれないと回答したが、これまでに日本人学校に対して閉鎖性を意識したことがあるかという質問に対しては、「あんまり思ったことはない」とした。その背景として、夕方までメイドや運転手が常駐しており、子ども好きな彼らが可愛がってくれた経験などを挙げている。

学校の方針に対しては、「学校では先生が考えてくれるので、その中で楽しむタイプ」の家庭だったのではないかと振り返る。基本的に JJS が示す方針に同意しており、それに対して特別不満を持つことはなかったようだ。ただし、「現地の子とふれあう機会があれば素敵」だと、より開けた異文化理解教育のイメージについては共感を示していた。「インドネシアには親日の人が多い」印象だったため、そのような人とふれ合える機会があればいいと考えている。

一方で、「異文化交流に興味ない人もいるだろうし、温度差もある中で」学校が異文化交流教育に取り組んでいる（楽器を触らせてもらうなど）」ことに理解を示した上で、JJS の異文化教育は十分であると結論づけた。「異文化交流のさわりだけかもしれないが、それはそれで良い」とし、「もっと知りたいと思ったら親子でやるだろう」と考察した。

この温度差という指摘は、筆者にとって新しい観点であると感じた。1. 1 で取り上げたような先行研究においては、子どもたちがグローバルな能力を身に着け、国際社会で活躍するために日本人学校の改革が必要であるとするものが多い。しかし、社会として異文化交流の経験が必要であったとしても、学校でそれを全生徒に同様に提供することは、学校に通う全ての生徒・保護者たちから求められているとは限らない。JJS は私立の学校であり、学校存続のためには生徒数の確保、保護者のニーズへの対応が重要である。そのため、需要が不透明な異文化交流のプログラムを盛り込むことは、JJS の運営上現実的ではないとも捉えられるのではないだろうか。

4.3 JJS 教員へのインタビュー調査

4.3.1 教員へのインタビュー調査：K 先生の場合

K 先生は、インタビュー当時 JJS の小学部教務主任である。

・教員の特徴について問いかけると、教員数は十分いるが、講師としての教員出身者や教員経験のない人もいることを挙げ、教員全体としての経験は不足していると述べた。一方メリ

ットとして、「エネルギーがある」「日本でやっている事務処理を分担できる」点を挙げている。曰く、日本では教員の絶対数が足りていないが、JJS ではその問題が解決できており、その分教材研究や、子どもと向き合う時間を確保できているそうだ。

K 先生によると、JJS における教員の雇用制度は以下の 3 種類である。

① 文科派遣

文部科学大臣からの委嘱により、各地の日本人学校へ派遣される形式である。

手順としては、以下の通りである。

(1) 個人が立候補し、市や県の教育委員会による面接等の試験を受け、各都道府県の教育委員会からの推薦を受ける。

(2) 文部科学省での試験を受験し、合格することで派遣される。

ただし、応募条件として、公立学校の教員として 3 年以上の勤務経験が必要である。

② 財団派遣（維持会採用）

各学校の日本人会を中心とした「学校維持会」等による採用方式である。

手順としては、以下の通りである。

(1) 海外子女教育振興財団の募集案内を確認し、個人で応募する。

(2) 各日本人学校による面接等の試験に合格し、派遣される。

海外子女教育振興財団のホームページによると、この方式の応募条件としては、日本の教員免許を取得していること、あるいは取得予定であることのみとなっている[36]。①の文科派遣とは異なり、日本や他の地域での教員経験を必要としていない点が特徴であるといえよう。

③ 現地採用教員

この場合、①や②のような派遣とは異なるため、派遣教員よりも長い年月勤務することが多い。

以上の採用方式を踏まえてK先生の発言内容を見直すと、JJS の教員の中には②の財団派遣を通じて着任している教員が一定数いると考えられる。

・JJS の生徒の特徴については、「家庭的に恵まれ愛情たっぷり素直に育っている子が多い」とし、「学習にも前向きでレベルの高い授業を展開できる」と捉えている。この発言からも、K 氏のインタビュー調査で指摘した生徒の家庭環境の影響が見られる。駐在員とい

---

[36] 公益財団法人海外子女教育振興財団「2024 年 4 月赴任 日本人学校等 学校採用教員 募集のページ（2023 年 11 月 17 日更新）」，2023 年 11 月 17 日,https://www.joes.or.jp/zaigai/teacher/boshu （最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

う比較的経済的に裕福な環境で育っている子どもが多く通っていることが、子どもたち同士の関係構築だけでなく、教員の授業運営のレベルを上げることに繋がっていると言えよう。この特徴は、JJS にとどまらず駐在員家庭の子どもが多く通学する日本人学校において共通して見られる特徴であると考えられる。さらに、「良い子供」が多い点に、日本との違いを感じるという。日本では衣食住など、教育以前の問題を抱える子どももいる一方で、経済的に恵まれている家庭の子どもが多く集まることから、「インドネシアへのリスペクトを伝えてくれる家庭が多い」うえに、「レベルの高い授業になる」という。「人としての人間性が 1 段も 2 段も違う」と高く評価していた。

・生徒の家庭環境について、インドネシアに永住している親子の数は「増えているというわけではない」という回答であった。永住家庭には国際結婚家庭が多く、JJS を母校として、中 3 の卒業まで在籍する場合が多いようだ。彼らの特徴としては「日本語が苦手な子が多い」のだが、「そのような子どもたちに日本語をしっかりと教え、将来を見据えたキャリア教育を展開することが課題」だと K 先生は認識している。

・日本人学校の「閉鎖性」について意見を求めると、「そもそも『閉鎖性』という言葉のチョイスが間違っている」と答えた。「もちろん現地人と同じ生活はできないが」と前置きし、「学校に行って、文化を尊重する、ルックダウンしない姿勢は獲得可能」と主張した。

ただその一方で、見ていると「良くないんじゃない？」という場面もある、と K 先生は話す。具体的には、挨拶できない児童が多かったり、運転手にランドセルを持たせる児童もいるという。更には、バスの乗務員（通称チャプロンさん）に「おい、チャプロン」と言った事件があったそうだ。この点から、JJS の生徒は世話してもらうことへの慣れがあるのではないかと K 先生は感じ取っている。

この要因として、結局は「親がちゃんと教えるかどうか」ではないかとするのが K 先生の考えである。一番近しい存在である親の発言や態度の端々が、子どもに伝わっているのではないかと推察していた。

・共生へのスタンスについて問うと、あくまで JJS の目的は「日本と同等の教育」であることを K 先生は強調した。その上で、現地の生活に子供をあてはめることは（学習指導要領の）「課程にない、教育ではない」うえに、「安全第一で教育をして、身を守って日本の教育をする中で、プラス α で現地の文化に触れる機会（を設けていること）は評価されるべき」と述べた。2.2 で述べたように、JJS は周辺地域の治安状況に影響されやすく、大きな懸念事項の一つとなっている。そのような状況下では、先行研究が求めるような本格的な異文化交流は現実的ではないとするのが、現地の実状であるといえよう。

・学校での高校受験に対する施策について聞くと、日本の都市部と比べると不利だが、「一

般的な小中と比べると充実している」という回答があった。例えば、現地には日本人生徒を対象とした学習塾や、オンライン授業などの環境が整っている点を挙げた。加えて、進学先のバリエーションについても早稲田渋谷シンガポール校など、日本にない選択肢があることを説明してくれた。

保護者からの受験関連のニーズは一部であり、「大きい流れでは見られない」という。その理由については、各家庭の受験について意識が高く、それぞれで準備することが多いからではないかとK先生は考察している。佐藤（2010）は、多文化共生教育を促進するのが難しい要因の一つとして、学力向上という圧力、特に高校受験という枠組みの存在を指摘している。特に中学校では高校入試対策が喫緊の課題となるため、各個人の課題を尊重したり、子どもの自尊心を向上させる取り組みが形骸化するという。また、多様な進路形成の可能性も狭まり、学力に応じて進路が決定していくことを問題視していた[37]。しかし、JJS の場合は進路や受験に関する問題は学校で解決するものではなく、どちらかというと各家庭で受験対策に向けた環境を確保するといったスタンスを取っていると考えられる。日本では、それぞれの家庭環境や保護者の受けてきた教育歴、価値観は大きく異なる。しかし、日本人学校の場合は駐在員の家庭であることが共通しているため、教育のレベルが全体的に高くなることが影響していると考えられる。

・インタビュー実施後、別途文書で JJS の英語教育について質問したところ、以下の回答を得た。

特徴としては、ネイティブ教師（英国人教師）が TT（チームティーチング）で日本人教師とともに授業に入り、正しい発音や英語表現を学んでいること。また、テキストに沿った授業だけでなく、調べ学習を基にスライドにまとめたものを英語で’発表するなどクリエイティブな授業を展開していること。週２回の授業を通して、確実に英語能力は向上している。（能力別にハイヤークラス・ ローワークラスの２クラスに分けて実施。）どの子も基本中の基本、日常会話レベルなら大丈夫。※ 小学５年で英検５級レベルが約３分の１・・・という感じかな… 課題としては、能力別のクラスが２クラスしかないため、個に応じた、よりきめ細かい指導ができているかと言われると、弱い部分があると感じる[38]。

日本の小学校よりは比較的レベルが高い、充実した英語教育が行われていることがうかがえる。しかし、あくまで週２回の授業の実施である上に、「基本中の基本、日常会話レベル」が問題ない程度の英語力である点には注意しておきたい。1.2 で示した先行研究でも指摘が

---

[37] 佐藤郡衛『異文化間教育－文化間移動と子どもの教育－』,株式会社明石書店，2010 年，p.193-196.

[38] K 先生への文書での質問調査より確認

あったように、実践的に運用できるレベルで英語が身についているという訳ではないのである。

4.3.2 教員へのインタビュー調査：Y 先生の場合

Y 先生は、群馬県の公立高校に 1 年勤務したのち、2023 年度より JJS に勤務している教員である。インタビュー実施当時、小学校 2 年生を担当していた。

・日本人学校の経験は、教員としては「出世コース」として見なされる傾向があるという。帰国後は管理職になったり、教育委員会に入ることがあるようだ。そのため、文科派遣で JJS に着任する教員は、「みんな優秀」という印象が強く、実際に現場でもそれを実感することも多いそうだ。また、文科派遣は、日本の学校と JJS の両方から給料がもらえる点も、文科派遣を目指して日本人学校にやってくる教員の目標の一つなのではないかと Y 先生は考えている。

・佐藤（2020）は、日本人学校の教育を変革していく上では、任期の短さによる流動性が原因として教員が「事なかれ」主義的な立場を取り、消極的な姿勢を取ることを課題としていた[39]。その点について JJS は実際どうなのか聞くと、「管理職や、上の先生にはその傾向がある」と Y 先生は話す。中には「まず出世」の人もいるものの、とはいえ JJS 全体としてはそこまで露骨ではないという印象だそうだ。

そしてその話に続いて、Y 先生は管理職の採用方式について触れた。JJS の管理職にはシニア派遣という形態が存在する。シニア派遣の公募を案内する文部科学省のホームページを参照すると、この形態での応募には、最低 18 年以上の教務経験が必要とされている。特に管理職（校長、教頭）の応募においては、「国内の学校において小学校、中学校、義務教育学校、中等教育学校の前期課程又は特別支援学校の小学部若しくは中学部（以下「義務教育諸学校」という。）の校長、副校長、教頭、主幹教諭（養護又は栄養の指導及び管理を司る主幹教諭を除く。以下同じ。）、指導教諭又は教諭（常勤講師を含む。）として、原則教職経験年数 21 年以上であること」が応募要件として挙げられている[40]。日本で長期間教師を勤めあげ、退職した人が JJS で管理職になれるのである。

Y 先生はこの制度を説明した上で「JJS では、シニアで来る管理職の先生が学校を私物化している」状況になりかねない側面があることを指摘した。また管理職の教員は「現場を放

---

[39] 佐藤郡衛「日本人学校の新たな課題」，佐藤郡衛,中村雅治,植野美穂,見世千賀子,近田由紀子,岡村郁子,渋谷真樹,佐々信行『海外で学ぶ子どもの教育－日本人学校、補習授業校の新たな挑戦』,株式会社明石書店,2020 年,p.34-41.

[40] 文部科学省「在外教育施設シニア派遣講師の公募について」,https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/1294120.htm（最終閲覧日 2024 年 1 月 11 日）

っておく傾向が強い」という話を、以前いた先生からも聞いたことがあるという。曰く、管理職は「下（＝実際に生徒の指導にあたる、現場の教員）にふるだけ」で、特に主任クラスや、JJS に着任して長い教員は不満を抱えていることがあるようだ。

例えば、体育祭のように、縦割りの活動をより強化せよという号令が管理職からかかることが度々あるものの、児童を大量に動かすために現場は苦労が増える。しかし、そのような現場の問題点を解決するために「時間割を変えるとか、変えられるところを変えて頑張ろうとはならない」ため、「先生がやることが増えていく一方になっている」現状を指摘している。この現象から、無理がある管理職の指令に対して現場の努力によって何とか成立している様子を見て、管理職はそれに満足して更に現実的でない指示が現場に下されるという悪循環の存在を見出すことができる。

ただし、「保護者からの評価は高い」と Y 先生は付け加える。縦割り自体は、日本ではできないから保護者に好評であるという認識は、教員側にも伝わっているようだ。

海外教育振興財団のホームページにあるように、日本人学校では、日本人会等、現地の在留邦人団体により運営委員会や理事会が設置されているのが基本である[41]。JJS の場合、ジャカルタ日本人学校維持会によって運営が行われている[42]。このように、JJS をはじめとした日本人学校は基本的に教育委員会がないという私立ゆえの特徴があるため、ある種の治外法権的要素があることを Y 先生は感じている。日本人学校は、海外で開校しているが、日本人しかいないという、日本でのしがらみ（≒教育委員会）だけがない環境で、管理職の意向に合わせて、自由に方針を決定できる「独壇場」と化してしまう可能性を持ち合わせているのだ。

・クラス運営に関する問題点として、学力や言語のレベルの差を Y 先生は感じている。JJS にはハーフの生徒も在籍している。場合によっては、クラスの中に日本語が分からない子どもがいるのだ。K先生のインタビュー調査にもあった通り、JJS の子は教育に力を入れている子もいる一方で、遅れている子もいる。Y 先生はそれを 1 クラスで管理するのは限界があると感じている。本来であれば学力のレベルを合わせて、基礎学力が足りていない生徒を取り出すべきだが、教員の数が足りていないと話した。

---

[41] 公益財団法人海外子女教育振興財団「日本人学校等とは？」,https://www.joes.or.jp/zaigai/teacher/school（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

[42] ジャカルタ日本人学校維持会「ジャカルタ日本人学校維持会定款」,2008 年, https://www.jjs.or.id/pdf/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%82%BF%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%B6%AD%E6%8C%81%E4%BC%9A%E5%AE%9A%E6%AC%BE.pdf （最終閲覧日：2024 年 1 月 1 1 日）

・日本人学校ならではの人間関係トラブルについて、「日本ではありえない」ものが起きているという。

日本での子ども同士の衝突と内容は概ね同じであっても、高学年に差し掛かってくると、「住んでいるマンションの階でマウント」を取ることがあるという。トラブルと表現するほどまでには発達しないが、「旅行でビジネスクラス乗った」「俺のお父さん社長だよ」「お父さん世界中回ってるんだよ」など、小学部低学年の子どもは、そのような発言を「無意識にやってしまう」ようだ。自分が駐在員家庭の身で、経済的に余裕があることに気づいた子どもがそれを振りかざす現象が起きているとY先生は感じている。「子どもが意識しているというよりは、親の意識が子どもにそれが伝わると怖いっていう感じ」だと、Y先生は懸念を示した。

JJSでマウントが起きる要因として、Y先生は日本人学校の閉鎖性との関連性を指摘している。海外の日本人学校であることから、日常的にかかわりを持つのは同じJJSの生徒が基本となり、日本人同士の繋がりが狭くなる。その上、基本的には学校と日本人の多いマンションの往復になることが、マウントに繋がるのではないかと推察していた。Y先生は事前調査にて、JJSでできない教育の一つとして「毎日放課後遊んだり、習い事をしたり、部活動に打ち込んだり、学校に残って勉強する、など。日本よりは少し制限があるかなと思います[43]」と回答している。JJSの生徒の一部はスクールバスで通学しており、バスの発車時刻は固定されているため、日本の学校のように自発的に遅くまで学校に残ることが難しい。そのため、半ば強制的に下校することが定まっているため、一層閉鎖性が強まっているといえよう。そのようなクローズドな環境下で、「親同士でいがみ合うというよりも、子が無意識に話して、それに勝とうとする」のでは、とするのがY先生の考えである。

このような事態は、筆者としては「日本ではありえない」とまでは断言できないと感じたが、Y先生が指摘していた通り「私立ゆえの」特徴でもあろうと考えられる。

・JJSの共生教育について尋ねると、試行錯誤する上で苦労している周囲の教員の様子を語ってくれた。

現地校との交流行事では、互いの文化などを発表する場が設けられたのと同時に、鬼ごっこ系、サッカー、福笑いなどを実施したそうだが、福笑いはあまり盛り上がらなかったと、他の教員から聞いたことがあるという。現地校側から、「説明がいるものは盛り上がらない」と言われたそうだ。また現地校交流に関しては、現地校の文化が違う点に言及した。例えば、校内で裸足で生活していたり、お菓子の持ち込みが許可されていたり、より柔軟な時間割で生活している点などである。子どもたちが自分たちと異なる校則、文化圏の中で生活する同年代の子どもと交流することは、視野が広がる反面、それを見て「なんでうちはだめなの？」

---

[43] Y 先生への文書での質問調査より確認

という疑問に繋がりかねないのが懸念点であるという。

・S・H 氏のインタビュー調査の中で言及されていた、異文化交流に対する子どものキャパシティの存在について筆者が述べると、Y 先生は「(キャパシティの) 存在は正しいと思う」と共感を示し、「パンクするのも分かる」と述べた。JJS では日本のカリキュラムも全うした上で異文化理解教育を受ける必要があることが大きいとした上で、「あんまり（現地校などと）交流しまくっても得るものがないのも納得」だとしていた。

・Y 先生自身は日本人学校に通っていなかったからこそ、日本人学校の環境の良さを感じており、だからこそ「せっかくなら、いい機会を持っているので、日本人学校にいる子はもっと鍛えてあげるべき」だと感じている。」多様な経験を最大限に提供するには、日本のカリキュラムを省くべきかもしれないが、日本で生活するには必要なものであるため難しい」としていた。

K 先生のインタビュー調査と共通して、日本のカリキュラムを実施する必要がある点が、異文化理解教育を更に進める上で大きな課題となっていることがうかがえる。

第 5 章　調査全体の考察

5.1　『みなみ十字』の調査、インタビュー調査を経て考えられる、JJS の特徴

これまでの調査を経て、筆者が考える JJS の特徴について述べる。

・親が駐在員であることが共通している

メリット：各家庭のレベルが比較的高くなり、学校側が提供できる教育の質が上がる傾向がある。

デメリット：親の異文化への態度が子どもにルックダウンする姿勢を取らせるなど、悪影響をもたらす側面もある。

・全国の子どもが集まり、頻繁に入れ替わる

メリット：幅広い世代、地域の子どもと接触できる機会があるのは日本の学校にない特徴といえる。

デメリット：周囲とのコミュニケーションに苦労する可能性が比較的高い。

・生徒の家と学校の距離が離れている

メリット：自家用車あるいはスクールバス通学になり、安全を確保できる。また親との距離が物理的に離れることで、生徒の自立を促すことに繋がる可能性がある。

デメリット：バスや自家用車での送迎となるため、放課後学校に残ることや課外活動を実施するハードルが高くなる。

・日本の義務教育課程に準拠したカリキュラムが組まれている
メリット：帰国後の学校生活に適応できる。
デメリット：共生教育をやろうとする際に、日本の教育をないがしろにすることができないので、なかなか本格的な共生教育を実践したり、共生教育に割く時間を増やすことができない。

・駐在員家庭の子どもが多く、親と接する時間が多くある
メリット：家庭環境の質や子供の人間性の向上、ひいては教育の質の向上につながる。
デメリット：クローズドな日本人コミュニティが形成される恐れがある上、経済的に余裕のある家庭が多く集まりやすいことから、自分の生活や家庭の豊かさを競いあうトラブルが生じることがある。

・幅広い世代の子どもと縦割りで交流できる
メリット：日本では中々できない経験であり、保護者の満足度はすこぶる高い。
デメリット：教員の負担が大きい上に、日本人同士のクローズドな関係は強まる。

・日本の学校とは異なる体制（優秀な教師が集う文科派遣と、若手が多く集まる維持会採用のミックス）
メリット：日本と比較してもレベルの高い教師が集まることにより、多様な経験、バックグラウンドの集積が期待できる。
デメリット：シニア派遣など、学校を独占できてしまう環境というリスクがあるのに加えて、日本人学校の経験がエリートコースであることによる「事なかれ主義」の教員が増えてしまう可能性もある。

5.2　JJS の現状、今後についての筆者の考察

以上の調査を踏まえて筆者が注目しているのは、基本的には生徒、保護者、教員の 3 者が JJS での教育に対して概ね満足している点である。多少の不満はあがったものの、「強いて言うなら」と前置きするものがほとんどであり、大半の当事者にとって JJS での経験は前向きにとらえられていた。

そのうえ、生徒にとって異文化との過度な接触機会は逆効果になる可能性が指摘された。子どもによっては異文化を受容する上で限度があり、それを超えると帰国後の生活に影響を及ぼす恐れがある。

そして保護者にとっても、本研究でインタビュー調査をした範囲に限って言えば、異文化理解教育に対しての更なる要望があるようには思われない。保護者たちの中では子どもの帰国が前提となっており、子どもが日本での生活に迎合できることが必須の条件となっている。よって多くの家庭のメインの目的は安全に教育を受けることにあり、本格的な異

文化との接触を求めている訳ではない。その上、それぞれの生徒や家庭には、教育に対しての温度差があることにも注意するべきである。もちろん異文化交流を促進させたい家庭も一定数存在するだろうと考えられるが、そうでない家庭の子どももいる学校において、義務教育を差し置いて異文化交流を行う行為は、大いに歓迎されるとは限らない。

加えて教員としては、保護者のニーズに加え、現地の治安や、日本人学校が日本の義務教育を実施しなければならないという制限を課せられていること、教員のキャパシティに限りがあることなどを踏まえると、更なる教育改革実践のハードルは高いと考えられる。

以上の 3 者の現状を踏まえると、先行研究が示すように、異文化理解教育を多分に盛り込むという行為は、当事者たちにとってメリットが小さいものになっている印象を受けた。

一方で先述のように、先行研究では、生徒が日本人学校を卒業後、グローバルに活躍できる素地を身につけることができるという理由からも、日本人学校における国際理解教育の推進を主張している。では実際に、社会に出るタイミングで、そのような経験が生きる機会があるかというと、実際は分からないのではないだろうか。ここでは、就職活動を例に考えてみたい。

大塚(2018)は、日本企業の求めている「グローバル人材」としての帰国子女（ママ）の実態を調査している。グローバル化による海外進出に伴い、国内外において幅広く活躍する人材が求められているため、帰国子女はそれに当てはまる人材として、国内外において需要が高まっていると言われている。日系企業は国内外でのグローバル化が求められたが、しかしその実態は「グローバル人材」の受け入れ・育成を形だけ推進することで対応するに過ぎなかったという。日系企業は、単一的な古い組織体制を改革することなく、それに従いつつ本社の意向を現地社員へ伝える英語力を持つ「グローバル人材」を求めているにすぎないのであった。すなわち、企業が組織のグローバル化という変革に向けての対策の一つとして「グローバル人材」を積極的に採用する一方で、その定義は曖昧であり結局のところ語学力を最も重要視した採用活動を行っているのだ[44]。この調査を踏まえると、就職活動においては日本人学校での異文化交流といったような、言語力以外の経験は特別に評価される訳ではないとも解釈できる。あるいは、社会に適応する上で、「日本人学校出身の帰国子女」の異文化交流経験は、就職時において制度上はニーズがないとも受け取れる。先行研究では学校の国際化は社会のためであるとしているが、その社会が国際化を人材に求めているようには見受けられない。

筆者自身としては、生徒、保護者、教育機関の 3 者が比較的 JJS に、そして生活環境と

---

[44] 大塚愛「帰国子女の就職実態について－「グローバル人材」という言葉の曖昧さに翻弄される帰国子女－」,https://sc62f1aacd976fa3c.jimcontent.com/download/version/1556836430/module/13541881192/name/otsuka2018.pdf ,2018 年, p.27-28.（最終閲覧日 2024 年 1 月 11 日）

してのジャカルタに満足している上、義務教育といった制度上のしがらみが多く、帰国後その効果を発揮できる環境があまり見られないといった現状があるもかかわらず、日本人学校に対して更なる「多文化共生」に関する取り組みを追求する必要はあるのか、疑問に感じている。日本人学校だけが先だって、自らを日本の学校から離れた存在にすることは、仮に社会のためであったとしても、生徒自身のためになっているかは分からない。それでも日本人学校を国際理解教育のフロンティアとして改革していくならば、日本人学校だけではなく、国内の学校も同時に大きく変わっていく必要があると考える。日本人学校出身の生徒たちの異文化交流経験を柔軟に受け入れ、共存し、日本人学校出身の子どもたちものびのびと個性を発揮できる環境や制度を整えることも同様に必要ではないのか、という疑問を投げかけ、本論文の結論としたいと思う。

参考文献

石附実,鈴木正幸『現代日本の教育と国際化』,福村出版株式会社,1991 年
大塚愛「帰国子女の就職実態について－「グローバル人材」という言葉の曖昧さに翻弄される帰国子女－」,https://sc62f1aacd976fa3c.jimcontent.com/download/version/1556836430/module/13541881192/name/otsuka2018.pdf ,2018 年（最終閲覧日 2024 年 1 月 11 日）
海外赴任 navi「海外学校事情（東南アジア）」,https://world.relocation.jp/appointed/childcare_education_guide05.html（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
公益財団法人海外子女教育振興財団「2024 年 4 月赴任 日本人学校等 学校採用教員 募集のページ（2023 年 11 月 17 日更新）」, 2023 年 11 月 17 日,https://www.joes.or.jp/zaigai/teacher/boshu （最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
公益財団法人海外子女教育振興財団「日本人学校等とは？」,https://www.joes.or.jp/zaigai/teacher/school（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
佐藤郡衛『異文化間教育－文化間移動と子どもの教育－』,株式会社明石書店, 2010 年
佐藤郡衛『海外・帰国子女教育の再構築－異文化間教育学の視点から』,玉川大学出版部,1997 年
佐藤郡衛,中村雅治,植野美穂,見世千賀子,近田由紀子,岡村郁子,渋谷真樹,佐々信行,『海外で学ぶ子どもの教育－日本人学校、補習授業校の新たな挑戦』,株式会社明石書店,2020 年
佐藤郡衛『多文化社会に生きる子どもの教育―外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』,株式会社明石書店,2019 年
ジャカルタ日本人学校「校長挨拶」,https://www.jjs.or.id/school-introduction/president-message（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
ジャカルタ日本人学校「JJS の歴史」,https://www.jjs.or.id/school-introduction/jjs-history（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
ジャカルタ日本人学校「児童生徒数」, https://www.jjs.or.id/school-introduction/member-number(最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
ジャカルタ日本人学校「施設・設備紹介」,https://www.jjs.or.id/school-life/school-facilities（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
ジャカルタ日本人学校「部活動」,https://www.jjs.or.id/school-life/extracurricular（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
ジャカルタ日本人学校「みなみ十字」,https://www.jjs.or.id/education/minami-cross（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 54 号』
ジャカルタ日本人学校『みなみ十字　第 53 号』
ジャカルタ日本人学校維持会「ジャカルタ日本人学校維持会定款」,2008 年, https://www.jjs.or.id/pdf/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%82%BF%E6%

97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%B6%AD%E6%8C%81%E4%BC%9A%E5%AE%9A%E6%AC%BE.pdf （最終閲覧日：2024 年 1 月 1 1 日）
ジャカルタ日本人学校社会科副読本編集委員『たんけん はっけんジャカルタのまち』,ジャカルタ日本人学校,2012 年
全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会研究局『国際理解教育 Q＆A』,株式会社教育出版センター,1993 年
大連日本人学校,『平成 28 年度　大連っ子』
ダリマナ,「【インドネシア】バンドンにある巨大屋内遊園地『Trans Studio Bandung』を訪れた。」,2018 年 9 月 3 日,https://darimana.net/bandung-transstudio/ （最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
Trip.com「タートルアイランド」,https://jp.trip.com/travel-guide/attraction/bali/serangan-turtle-island-homestay-10522488/ （最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
額賀美紗子,芝野淳一,三浦綾希子『移民から教育を考える　子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』,株式会社ナカニシヤ出版,2019 年
松尾知明『多文化教育をデザインする　移民時代のモデル構築』,株式会社勁草書房,2013 年
松尾知明『多文化教育がわかる事典－ありのままに生きられる社会をめざして』,株式会社明石書店,2013 年
文部科学省「在外教育施設シニア派遣講師の公募について」,https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/1294120.htm（最終閲覧日 2024 年 1 月 11 日）
文部科学省「在外教育施設の概要」,https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/002.htm（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）
文部省海外子女教育研究会『日本人学校教師ガイド』,株式会社時事通信社, 1996 年
YUNA「ジャカルタ(インドネシア）で駐在妻していました」, 2020 年 7 月 7 日, Hatena Blog, https://taky16.hateblo.jp/entry/2020/07/07/173255（最終閲覧日：2024 年 1 月 11 日）

謝辞

本論文の執筆にあたり、インタビュー調査を実施させていただいた保護者の皆様、元 JJS 生の皆様、先生方、資料をご提供いただいた K 先生、Y さんのおかげで、本論文を完成させることができました。この場をお借りしまして、深く御礼申し上げます。

そして、最後まで丁寧に論文執筆のご指導をいただいたアジア文化コースの多和田裕司先生、アジア文化コースの先生方、学生の皆様に、心から感謝申し上げます。